

p 音再考

——琉球方言ハ行子音 p 音の素性^{すじょう}——

中 本 謙

キーワード：狭母音化, p 音, b 音, ハ行転呼音化

要 旨

琉球方言のハ行子音 p 音は、日本語の文献時代以前に遡る古い音であるとの見方がほぼ一般化されている。この p 音について $\phi > p$ によって新たに生じた可能性があるということを現代琉球方言の資料を用いて明らかにする。基本的に五母音の三母音化という母音の体系的推移に伴って、摩擦音 ϕ が北琉球方言では p, pʰ へと変化し、南琉球方言では, p, f へと変化して現在の姿が形成されたと考える。従来の研究に従い、五母音時代を起点にするのであれば、ハ行子音においても起点として ϕ を設定しても問題はないと考える。そして、この体系的変化と連動してワ行子音においても $w > b$ の変化が起こったとみる。また、ハ行転呼音化現象や語の移入時期という側面からも p 音の新しさについて考察する。内的変化として $\phi > p$ が起こり得る傍証として $kw > \phi > p$ の変化傾向がみられる語も示した。

はじめに

琉球方言のハ行子音 p 音は、文献時代以前の姿^{注1}であり、現在までの永きにわたり保持され続けている。このような見方は、上田 (1898)、伊波 (1907) 等の研究によって周知されている。服部 (1959: 283) では、この p 音残存の要因について

奄美群島・沖縄群島の諸方言では、*k が /h/ に変化した場合に、*p がさらに /h/ に変化することがくいとめられた蓋然性が大きい。

とし、奄美、沖縄方言では k 音が h 音化することにより、p 音が保たれたとしている。しかし、*k, *p が共にあらわれる宮古・石垣方言については、自律的に保たれたとし十分な説明がなされていない。中本正智 (1976)、(1990) では、これを踏まえた上で p 音残存の要因を母音の体系的変化による子音の体系的変化にもとめている。

中本謙 (2008)、(2009) では、従来、文献以前に遡るか否かで論が分かれていた南琉球方言のワ行子音 b 音が $w > b$ の変化であれば、ハ行子音 p 音も $\phi > p$ の変化である可能性はないかとの見方を示してきた。南琉球のワ行子音 b 音については、名嘉真 (1996)、上村 (2000)、柴田 (2001)、内間 (2004) 等^{注2}があり、現在では $w > b$ の見方が優勢で

ある。琉球方言の p 音が文献以前に遡るとの見方がほぼ定説化されている中で逆に新しい可能性を示唆したものに早くは亀井孝 他編 (1964)^{注3} がある。また、柳田 (1993) は日本語音韻史の立場から、琉球方言のハ行子音 p 音は文献以前に遡らないとの見方をしている^{注4}。

本稿では、中本謙 (2009) で言及しなかった北琉球方言も含めて再びハ行子音 p 音について考察する。基本的には、狭母音化という五母音の三母音化の現象^{注5} によって摩擦音 ϕ が破裂音化することによって新たに p を生じたと考える。

琉球方言における母音変化に伴う子音変化を有機的に結びつけた研究としては、中本正智 (1976) が詳しい。これは、琉球方言全域を網羅した膨大な資料から母音の体系的変化という要因によって子音が体系的に変化をすることについて帰納的に明らかにしたものである。従って、現在の琉球方言の共時態から明確に設定できる五母音時代から論をすすめている。五母音時代から論をすすめるということであれば、平安時代以降ということになる。ハ行子音においても一つの基準として日本語史に照らして考えれば、p ではなく ϕ から論をすすめることも可能であると考え。本研究では、琉球方言のハ行子音を ϕ からの変化として、 $w > b$ の変化も有機的に結びつけて考察し、琉球方言ハ行子音 p 音の素性にせまりたい。

1 南琉球方言のハ行子音

1.1 語頭

琉球方言の中でも南琉球方言では、ハ行子音 p 音が顕著にみられ、与那国や宮古の池間島、池間島から分村した伊良部島佐良浜、宮古島市西原を除くすべての地域で見られる^{注6}。ここでは、主に南琉球方言の $\phi > p$ の可能性についてあらためて中本謙 (2009) で述べた論を考える。

まず、宮古来間方言、八重山白保方言を例^{注7} に語頭の中央語との対応関係を示す。

宮古来間方言

中央語	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
来間方言	pa	pi	fu	pi	pu

語例

[pana] (花) [pa:] (刃) [paku] (箱) [pa:tsi] (蜂) [pataratsi] (働く)
 [pʰi:tu] (人) [pi:kai] (光) [pi:tsi] (一つ) [pidai] (左) [ui:pi:tu] (老人)
 [fukuru] (袋) [fu:ta:tsi] (二つ) [fu:ta] (蓋) [funi] (船) [fu:i] (振る)
 [pi:] (屁) [pira] (籠)
 [puni] (骨) [pu:] (彫る) [pu:] (帆) [pu:su] (星) [upumudzi] (大麦)

八重山白保方言

中央語	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
白保方言	pa	pī	ϕu	pi	pu

語例

[pa:] (葉) [pataraguN] (働く) [paŋa] (鼻) [paŋaga] (裸) [pa:ri] (針)
 [pītu] (人) [pīroma] (昼間) [pīsohaN] (広い)
 [ϕu:ruN] (振る) [ϕukahaN] (深い) [ϕuta] (蓋) [ϕu:ni] (船)
 [pi:] (屁)
 [pu:] (帆) [pu:ni] (骨) [puso] (臍/ほぞ) [putso] (星) [ϕuka] (外)

中本謙 (2009) では、このようなハ行子音に対応する p 音について、南琉球方言で見られる [bana] (わな) [butu] (夫) [bi:] (坐る) のようなワ行子音 b 音が w > b の変化であれば、平行的に ϕ > p の変化も起こった可能性があるということを示した。南琉球方言の w と b の変化を ϕ と p の変化と平行的にみることにについては、w と b のどちらが古いとみるかという点は大きく異なるにしても亀井 他編 (1964) や加治工 (1982)、名嘉真 (1996) などの見解と一致する。

中本正智 (1976) は、琉球方言全域を網羅した膨大な資料から帰納的に母音変化にもなう子音の変化について体系化したものである。その中で宮古、八重山方言のハ行子音の成立について、母音の狭母音化の影響で近接したウ段とオ段の区別をするためにハ行子音は、f と p に分化したとしている。本研究でもこの理論を踏まえ、宮古、八重山方言でウ段とオ段の区別をするための子音変化が起こったとみる。しかし、ウ段にみられる唇音性を強度にきわだたせた唇歯摩擦音 f については ϕ からの変化と捉え、p 音の素性については ϕ から p の変化による新しいものではないかと考える。つまり、狭母音化によって子音の緊張が高まり、摩擦音から破裂音へと変化したという見方である。

先に示したように南琉球の中にも与那国や宮古の池間島、池間から分村した伊良部島佐良浜、宮古島市西原の方言のようにハ行子音が p 音でない地域が存在する。これらの地域についてはどのようにみるべきか。

まず八重山諸島の中でなぜ与那国方言だけが h 音化したのかについて中本正智 (1990: 226) では、次のように述べられている。

何故、与那国島だけが p 音を失ったのか。その理由は、イ・ウ段の脱落現象のはげしさにもとめることができよう。すなわち、かつては宮古のようにハ行音の構造が p^s・f/p であったものが、イ・ウ段の脱落によって 0/p^{ゼロ} の構造になった。この構造から、対立音素を失った p が、いっきょに h 音化していったと推察される。このようにして、与那国方言は、八重山の諸方言に先んじて p 音を失っていった

と考えられる。

つまり、[tʰu:] (人) [tʰai] (額) [tʰa:] (蓋) [kʰun] (吹く) のようにイ段、ウ段で脱落することにより 0/p^{ゼロ}の構造になり、対立音素を失ったがために、いっきよに h 音化したということである。南琉球方言では、このような現象は与那国方言に顕著にみられるので穏当な見解であると考えられる。

また、池間島方言、伊良部島佐良浜方言、宮古島市西原方言のハ行子音が h 音であることについても、中本正智 (1990) では池間系方言のハ行子音に ϕ がみられないことから、外的要因^{注8}によって h 音化しただろうとしている。老人層に p 音をとどめる者があるが、 ϕ はみられないという記述からも外的要因によって比較的新しい時期に h 音化したとみるのが穏当であると考えられる。

以上、観点からすれば、与那国方言にしても宮古池間方言にしても、他の宮古、八重山方言同様にかつては、p 音であったが一挙に p から h へと変化したことが理解される。

1.2 語中

南琉球方言の語中のハ行子音は、多くの語でハ行転呼音化現象が起きている。語頭と同様に宮古来間方言、八重山白保方言の例で示すと次のとおりである。

宮古来間方言の語例

[ka:] (皮) [ma:ʔi] (回る) [kai:] (変わる) [kju:] (今日) [mai] (前) [no:si] (直す)
[jara:jara] (柔らかい)

八重山白保方言の語例

[ka:] (皮) [ka:ruN] (変わる) [me:] (前) [jarahaN] (柔らかい) [ma:ruN] (回る)
[kju:] (今日)

このように、ほとんどの語でハ行転呼音化の現象が起きているにもかかわらず、語中のハ行子音 p 音も語例は少ないが存在する。例えば、宮古来間方言では、[upo:nu] (大きい) [kupa:nu] (固い) 等のような例がみられる。従来、これらの語もハ行転呼音化を免れ、文献時代以前の p を保持しているとの解釈が多くなされてきた。しかし、これらの語は、一度ハ行転呼音化し回帰したとみることもできるのではないか。なぜなら、「柔らかい」は宮古来間方言では [jara:jara], [ja:ramunu] のようにハ行転呼音化しているが、同じ宮古方言でも伊良部佐和田方言では、[japa:japa], [japaragimunu] (琉球大学沖縄文化研究所編 1968) のようにハ行転呼音化していないからである^{注9}。

また、南琉球方言では、語中においても $w > b$ の変化が確認できることから、これらの語中のハ行 p 音は、語頭と同様に $\phi > p$ の変化であると考えられる。例えば、宮古来間方言では [ibi:] (植える) [tʃabaN] (茶碗) のような例がみられ、八重山諸方言でも黒島方言 (宮良 1930) で [abatirun] (慌てる)、白保方言で [ʃabaN] (茶碗) のような例がみられる。

かりまた (2009: 5) では、漢語由来の移入語である「茶碗」の例をあげ、次のように

述べている。

奄美沖縄諸島の下位方言で $tjawaN$ である。このことは、奄美諸島方言では、 $awa > o:$ の同化が完了したあとの移入語であり、沖縄諸島の方言では $awa > a:$ の w 消失が完了した後の移入語であることを示唆している。そうでなければ、 $tjo:N$ や $tja:N$ などの語形になっているはずである。

確かにかりまた (2009) で示されたように $[ko:]$ (皮) のような語中の w は単に w が消失したのではなく前後の母音と同化したものとみられる。そのように考えなければ、奄美方言でみられる $[ko:]$ (皮) $[?o:]$ (粟) の説明がつかない。これらは、半母音 w が u に近似した音であるから $awa > o:$ のようになると考えられる。そして奄美諸島とそれ以外という区別からしても 1609 年の薩摩藩の琉球侵略による割譲との見方も考えることはできる。このことからかりまた (2009) では、宮古、八重山でみられる $[tjabaN]$ (茶碗) も $awa > a:$ の変化以降に持ち込まれ、さらに $w > b$ の体系的な変化も $awa > a:$ 以降におこったとしている。

ここで語の移入時期という側面から語中の $\phi > p$ について考えてみたい。八重山方言 (宮良 1930) で $[apira]$ (家鴨) という語がみられる。「あひる」は、室町時代末期にできた語であり、ハ行転呼音化が収束した後にできたため「あいる」とはならなかったとされている。従って、 $[apira]$ の p 音は、文献以前の古音に遡るものではなく、琉球方言に移入された後、 $\phi > p$ によって生じたものであると考えられる。かりまた (2009) の $w > b$ に従って考えれば、八重山方言の p は $\phi > p$ によるものだということになる。ただ慎重を期したいのは、 $[tjabaN]$ (茶碗) のような語から $w > b$ の体系的変化の時期を「茶碗」の移入以降 (17 世紀半ば以降) と確定してもよいかという問題はのこされる。 $[tjabaN]$ (茶碗) のもう一つの見方として、「優勢なる体系に引きずられた変化」である可能性はないか。つまり「茶碗」の移入された時期に宮古、八重山方言で、すでに体系的に $w > b$ の変化が起こっていて、それに引きずられて $[tjabaN]$ (茶碗) となったとみることはできないかということである。しかし、仮にそうであったとしても、 $w > b$ と同じように $\phi > p$ という破裂音化の傾向はあったとみることができる。因みに語頭においても語の移入時期という側面から見れば八重山方言 (宮良 1930) に $[pizi]$ (返事) のような和製漢語由来による語もみられ、 $\phi > p$ によるものであると考えられる。

以上、南琉球方言では、語中においても $w > b$ の変化がみられること、語の移入時期という観点からみても $\phi > p$ の可能性が考えられる。

2 北琉球方言のハ行子音

2.1 語頭

北琉球方言に見られる語頭のハ行子音 p 音についても ϕ からの変化であると考えられる。そして、その変化の要因を中本正智 (1976) に従い、狭母音化に伴う子音の変化である

とする。つまり南琉球方言と同様に、大きく異なるのは、*p* を文献以前からの古音と捉えず、狭母音化による摩擦音の破裂音化によって新しく生じたとみる点である。

北琉球方言と南琉球方言のハ行子音 *p* 音の大きな相違点は、喉頭化の *pʰ* と非喉頭化の *p* によってイ段とエ段、オ段とウ段の区別がおこなわれているということである^{注10}。

沖縄北部饒平名方言のハ行子音の対応関係を例に示す。

中央語	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
饒平名方言	pa	pʰi	pʰu	pi	pu

語例

[pa:] (歯) [patʰi] (蜂) [pʰi:] (火) [pʰinsu:] (貧相) [pʰuni] (船) [pʰuta] (蓋) [pi:] (屁)
[pidatiN] (隔てる) [pu:] (帆) [pu:ʰi] (星)

これらの喉頭化の *pʰ* について、中本 (1990: 229-230) では *p* 音残存の要因として概略次のように示している。

奄美・沖縄方言では *o > u*, *e > i* または *e > i > i* の変化によってエ段とイ段、オ段とウ段が統合されて区別が失われるのを避けるためにイ段は *pʰi* エ段は *pi*, ウ段は *pʰu*, オ段は *pu* のように *pʰ/p* の音素分割がもたらされた。この音素分割によって新たに発生した無気喉頭化音 *pʰ* は無気音であるため、直接 ϕ , *h* に変化し得ない音声であり、結果として *p* 音が維持されるはたらきをしている。また、カ行子音の *h* 音化 (例えば、カはハに変化する) も *p* 音をとどめる構造をつくり出したとしている。これは、カ行とハ行の統合を避けるための構造的関係である。

本研究では、南琉球方言、北琉球方言ともに、狭母音化による子音の変化によって多くのハ行子音 *p* 音があらわれたと考える。つまり北琉球方言では *o > u*, *e > i* または *e > i > i*, の変化によってイ段、ウ段に緊張が加わり ϕ が *p* へと変化し、さらに段の区別をするために *pʰ* と *p* の対立が生じた。そして、これに引きずられるようにア段、エ段、オ段の ϕ も破裂音化して *p* へと変化していったと考えられる。また、服部 (1959), 中本正智 (1990) 等の従来の研究で言われているようにカ行子音の *h* 音化もカ行とハ行の統合を避けるための構造的関係であると考えられる。つまり統合をさけるためにハ行の ϕ は破裂音化していったと考えられる^{注11}。このように考えれば、久高方言 (中本正智 1985) のような姿も理解できる。

中央語	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
久高方言	p ^h a	pʰi	pʰu	p ^h i	p ^h u

語例

[p^ha:] (歯) [p^hana] (花) [p^hi:gi] (髭) [p^hima] (暇) [p^hu] (蓋) [p^hun] (船) [p^hi:] (屁)
 [p^hira] (籠) [p^hu:] (穂) [p^hun] (骨)

それでは、首里方言を中心とした沖縄南部方言のようにハ行子音が h 音の地域はどのように考えられるか。沖縄奥武方言を例に示す。

中央語	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
奥武方言	ha	çi	φu	çi	hu

語例

[ha:] (刃) [hani] (羽) [çi:] (火) [çitçei:] (額) [φuni] (船) [φuta] (蓋) [φu:] (帆) [çi:] (屁)
 [çira] (籠) [φuni] (骨)

これらの地域は、強文化圏である大和文化^{注12}の流入により p 音化せずに、もしくは p 音化への変化傾向はあったかもしれないが、h 音へとなくなっていったと考えられる。また、カ行子音が h 音化しないということも関係しているとみられる。

以上のように考えれば、狭母音化による破裂音化という現象で琉球方言におけるハ行子音の φ > p を一貫して説明できると考える。

2.2 北琉球方言語中のハ行子音

北琉球方言でも語中のハ行子音は、ハ行転呼音化しており、また awa > a: の変化もみられる。

沖縄北部饒平名方言の例を示す。

[ha:] (皮) [pe:] (灰) [ʔo:dzi] (扇) [me:] (前) [no:φuN] (直す)

しかし [japarasahaN] (柔らかい) [φupahaN] (固い/こはし) のようにハ行転呼音化しない例も少ないがみられる。これは、南琉球方言と同様である。

北琉球方言の語中のハ行子音 p 音も φ > p の変化であると考えることができる。なぜなら、南琉球方言と同様に「あひる」は、ハ行転呼音化せずに p 音であられるからである。例えば、今帰仁与那嶺方言(仲宗根 1983)では、[hap^he:ra:]、与論方言(菊・高橋 2005)では [apira] となる。既述したように室町末期成立の「あひる」はハ行転呼音化を免れた語である。北琉球方言においても「優勢なる体系に引きずられた変化」によって p 音化したとも考えられるが、仮にそうであったとしても φ > p という破裂音化の傾向はみられることになる。

2.3 北琉球方言におけるワ行子音

北琉球ではオ段は $o > u$, エ段は $e > i$ または $e > i > i$ のように変化し, この変化によって沖縄北部方言のハ行子音は破裂音化し喉頭化と非喉頭化による区別が発生したと考えられる。一方, 南琉球では, 中本正智 (1990) でも示されているようにオ段は $o > u$, エ段は $e > i$ のように i を経ずに i に変化している。これによってイ段, ウ段に緊張が加わりイ段では ϕ が摩擦を伴う p_i へ, ウ段では唇音性を強度にきわだたせる緊張した f, v (唇歯摩擦音) へと変化させていったと考えられる。南琉球で体系的にみられる $w > b$ の変化は, 破裂音化の傾向にこの唇音化をきわだたせる緊張が要因であると考えられる。つまり, この母音変化の違いがワ行子音 w の変化とも関わっていると解される。

北琉球方言では, 「居る」や「い草」のようにワ行子音が b 音に対応する語が数例みられ, また地域によってはワ行子音が g や gw に対応する例がみられる。

ワ行子音に対応する b 音の語例 (内間, 新垣 2000)

沖縄北部奥方言 [bi:] (蘭草) [bi:n] (坐る) [bidoma] (坐る場所)

沖縄辺野喜方言 [bi:] (蘭草) [bi:n] (坐る)

他にも沖縄北部屋我方言 [bjun] (坐る) [bire:] (坐れ), 沖縄饒平名方言 [bjun], 与論立長方言 (中本正智 1976) [bjun] 等でも見られる。この様な b 音は i と結合した子音という音環境であることから狭母音化にともなう子音の緊張による変化であると考えられる。

ワ行音に対応する gw, g 音の語例

沖縄辺野喜方言 (内間, 新垣 2000)

[gwata] (腹) [gwaki] (脇) [gwarabi] (子供) [gwaki:n] (分ける)

喜界島花良治方言

[gutu] (夫) [gunu] (斧) [guba] (おば) [guriruN] (折れる) [guduri] (踊る)

[gui] (砂糖黍 / 萩に対応)

久高島方言 (法政大学沖縄文化研究所 1985)

[gi:n] (坐る) [gudz] (砂糖黍 / 萩に対応) [gutu] (夫) [guin] (折る)

これらの例も狭母音化にともなう子音の変化として捉えることができる。つまり, ϕ が破裂音化するのと連動して w が破裂音化していく傾向があったと考えられる。半母音 w は, 両唇と軟口蓋の接近音である。北琉球方言では, 南琉球方言と狭母音化の仕方が異なるため, 宮古方言のようにウ段で唇音性を強度にきわだたせる緊張した f, v (唇歯摩擦音) 等もみられない。そのため, 北琉球方言においては南琉球方言のように両唇を破裂させる $w > b$ の体系的な変化に至らず, 限られた地域で部分的に w の軟口蓋破裂音化の傾向がみられると考えられる。

また, 琉球方言における $w > b$ について注目すべき点は, 北琉球方言においても中央語のワ行子音に対応する b 音がみられる地域では, ハ行子音に対応する p 音がみられ

るということである。

以上のことから北琉球方言においても狭母音化に伴う $\phi > p$ の変化に連動して w 音が破裂音化していく傾向があることが解される。

3 琉球方言における kw > ϕ > p

ここまで、琉球方言のハ行子音 p 音は、狭母音化に伴う $\phi > p$ の変化によって成立したとの見方を示してきた。これは、日本語史にみられる $p > \phi$ の変化とは逆行した変化であり、琉球方言独自の発達であるといえる。ここでは、 $\phi > p$ という変化が内的変化として起こり得るといふ傍証について考察する。

中本謙 (2009) では、沖縄浜比嘉島比嘉方言でハ行子音に対応する語ではないが、次のように $\phi > p$ に変化する傾向にある語を示した。

[kwi:] ~ [ϕ i:] ~ [pi:] (声)

[kwi:to:N] ~ [ϕ i:to:N] ~ [pi:to:N] (越えている)

[kwe:ti] ~ [ϕ e:ti] ~ [pe:ti] (肥えて)

[kwe:to:N] ~ [ϕ e:to:N] ~ [pe:to:N] (肥えている)

[kwe:muN] ~ [ϕ e:muN] (食べ物)

これらの語は、音声的なものであるが、ほぼ p に近い音で調音されることがある。琉球方言と中央語の音韻対応を踏まえると、次の変化が考えられる。[pi:] (声) を例に示す。

koe > kui > kwi: > ϕ i: > pi:

この現象についてかりまた (2009: 10) では、

唇音化した無声軟口蓋破裂音の kw が無声の両唇破裂音 p に変化していたとすれば、声道と聞こえの近似による変化 (kw > p) が起きその p の摩擦音化したアロフォン ϕ と、本来の語形 [kwi:] が共存している可能性はないだろうか。

との見方を示している。

また鹿児島方言等^{注13}では、kw > p の報告があるから、浜比嘉島比嘉方言の例について kw > p > ϕ の変化との見方もなされそうである。しかし、もし kw > p の変化であるなら [kwi:] ~ [pi:] や [kwe:] ~ [pe:] という音声的なゆれが確認できそうであるが、それはみられない。

浜比嘉島比嘉方言のような現象は、金武町金武方言でも「声」は [kwi:] の他に音声的に [ϕ wi:] や [ϕ i:] のようにあらわれることがある。また恩納村真栄田方言においても個人差はあるが音声的に「声」は [ϕ i:] ~ [pi:] のように調音されている。また、摩擦音の破裂音化という変化においては、沖縄方言よりさらに進化した形で八重山竹富方言に確認される。國學院大學日本文化研究所編 (1990: 71) を示す。

本土 /CurV(kurV · hurV)/ は、無気喉頭化子音拍の /p^hv/ に対応しているものが多く認められる。周辺諸方言との対応を考慮すると、これは /kurV · hurV/ → / (Q)

hwV・(Q)fv/ → /pʷV/ という変化過程を経ているものと考えられる。(周辺方言として波照間方言の例を*で示した)。pʷusadaru (黒い* FuhaN) pʷasadaru (暗い* ffahaN) pʷa (鞍) nappʷa (枕* maffa) pʷi (烏賊の墨* ffe:) pʷui (陰毛〈黒毛〉) pʷuN (降る* ffuN)

八重山竹富島方言については加治工(1997)でも音韻体系が示されており、p音については、/piRreR/[pi:re:](呉れる)のようにpʷを音素として認めていないという相違がみられる。このように八重山竹富島方言では、音素として無気喉頭化音pʷを認めるかの相違はあるものの、中央語の/kurV・hurV/に対応する語においてϕ>pの変化と捉えられる語がみられるのである。

このkw音におけるϕ>pの変化を当然ハ行子音p音と混同してはならない。この変化をここで示す意味は、琉球方言において借用語等の外的な要因ではなく、内的変化としてϕ>pという摩擦音から破裂音への変化が存在するということである。

4 まとめ

- ①中本正智(1976)に従い狭母音化による子音の変化によって現在のよう琉球方言のハ行子音が成立したと考える。しかし、大きく異なるのは、ϕを起点とし、母音変化に伴う子音の破裂音化によって新たにpが発生したとする点である。母音の起点を現在の琉球方言の共時態から明確に設定できる五母音にするのであれば、日本語史に照らしてハ行子音をϕに設定することも可能であると考えられる。
- ②狭母音化に伴ってイ段、ウ段に緊張が加わり、奄美、沖縄では段の区別をするために摩擦音ϕが破裂音化しpʷとpを生じ、宮古、八重山では段の区別をするためにϕからfとpが生じた。
- ③ワ行子音に対応するb音がみられる地域とハ行子音p音がみられる地域が一致する。これは、琉球方言において、ϕ>pに連動する形でwが破裂音化したとみることができ。ただし、北琉球方言においては、体系的にハ行子音がp音であってもワ行子音b音は[bi:N](坐る)のように限られた語にみられる程度である。北琉球方言においてはウ段で唇音性を強度にきわだたせる緊張したf, v(唇歯摩擦音)等もみられないため、両唇を破裂させるw>bの体系的な変化に至らず、wは軟口蓋で破裂音化したg音もしくは、その傾向にあるgw音が部分的にみられると考える。
- ④語の移入時期という側面からみても、「あひる」のように室町時代末期に出現しハ行転呼音化を免れた語が、八重山(宮良1930)で[apīru], 与論方言(菊・高橋2005)で[apira:]のようにあらわれる。また語頭においても和製漢語の「返事」が八重山方言(宮良1930)で[pizi]とあらわれる。仮にハ行子音がp音であるという「優勢なる体系に引きずられた変化」であったとしてもϕ>pの傾向は認められる。
- ⑤kwの語において、摩擦音ϕから破裂音化pへの変化傾向がみられる。これは、内的

変化として $\phi > p$ の変化があり得るという傍証となる。

おわりに

琉球方言と本土方言が分岐した時期は、服部 (1959), (1976) で示された 3 ~ 6 世紀が一つの目安とされている。そして琉球方言のハ行子音 p 音は、分岐以前からの姿を保持しつつけてきた古音であるとの見方が一般的になされてきた。しかし、母音変化に伴い新たに生じたものであるとなれば、琉球方言の持つ古さの一つが独自の発達へと姿を変えることとなる。

注 1 p 音が中央語でいつ頃まで用いられたかについては諸説あり、例えば服部 (1976) のように奈良時代は p 音であったとの見方もある。

注 2 w > b の要因について、上村 (1992) は、宮古諸島、八重山諸島の母音、子音の多くの音韻変化の要因を呼気の強さにもとめ、この呼気の強さが w > b をひきおこしたとの見方を上村 (2000) で示している。また内間 (2004) では、w > b の要因を狭母音化にもとめている。

注 3 亀井孝は次のように述べている。亀井孝 他編 (1964: 293)

琉球のほうで本土のワ行にあたるものを、ある時代にバ行のものと混じたとみることには十分に可能である。そこで、いまここに琉球のうち、とくに八重山方言は、唇音の摩擦音を閉鎖音化する傾向をある時代にとったものと仮定するならば、それと平行に、ハ行音もかえって f から p への道をたどったかもしれない。

注 4 柳田 (1993: 1053) では、次のような見解が示されている。

沖縄方言においては、中世に多量に p 音が発生した際、この動きにひかれて、一般の語のハ行音も $\phi > p$ に転じることになったのではないかと考える。知られているように、沖縄方言においても、語中のハ行音は本土方言と同じく一般に ϕ を経て、いわゆるハ行転呼現象を起こしている。語中の場合と同じく、語頭のハ行音も、本土方言と同じく ϕ に転じていたと見た方が自然なのではないかと考える。

注 5 狭母音化の時期について外間 (1986) では、15 世紀末頃にはかなり進行していたとの見方をしている。また高橋 (1991) によれば 16 世紀にはまだ狭母音化が完了していないとの見方がなされている。

注 6 中本正智 (1990: 208) の分類表から参考までに南琉球方言を抜き出して示す。

種	類	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
B	1	p	p ^s	f	p	p
	2	h	h	f	h	h
	3	p	p ^s	h	p	p
	4	h	c ^r	h	h	h

1 類が宮古方言、2 類が池間島方言 他、3 類が八重山方言、4 類が与那国方言

注 7 本稿で用いる資料のうち、文献の併記がないものは、筆者臨地調査資料による。なお、筆者臨地調査資料のうち、喜界島花良治方言資料は、平成 22 年度科学研究費補助金、基盤研究 (C) 「北琉球方言の調査研究——与路島方言・諸島方言・喜界島方言を中心に——」、課題番号

20520416 の調査による。

注 8 中本正智 (1990: 223) では、

宮古島が宮古で最大の漁村であり漁業の改革を通して沖縄、本土との接触が多く、進取の精神が旺盛であった文化的な外的要因がはたっていたものと考えられる。

と述べている。

注 9 日本語史において「母」という語は一度ハワとなり、ハハへと回帰したとの見方がなされている。琉球方言にみられる限られた語においても回帰した可能性は考えられるが、その要因については課題が残される。

注 10 中本正智 (1990: 208) の分類表から参考までに北琉球方言を抜き出して示す。

種	類	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
A	1	p	pʳ	pʳ	p	p
	2	pʳ	pʳ	pʳ	p ^h	p ^h
	3	p	p	p	p	p
	4	p	t	p	p	p
	5	ϕ	pʳ	ϕ	pʳ	ϕ
	6	ϕ (h)	ϕ (h)	ϕ (h)	ϕ (h)	ϕ (h)
	7	ϕ (h)	s	ϕ (h)	ϕ (h)	ϕ (h)

1 類が沖縄北部名護方言 他, 2 類が久高島方言, 3 類が奄美大島佐仁方言 他, 4 類が沖縄北部伊江島方言, 5 類が沖縄北部塩谷方言 他, 6 類が沖縄北部伊是名島方言 他, 7 類が徳之島北部天城方言 他

注 11 中本正智 (1990) でも示されているように沖縄恩納方言, 津堅島方言では, ハ行子音が p でカ行子音が h 音化していない。このことから, ハ行子音 p 音がみられる要因は必ずしも k の h 音化だけではないとの見方もなされている。

注 12 例えば, 擬古文で有名な平敷屋朝敏 (1700~1734) 等, 和文学の影響などは大きいと考えられる。

注 13 枕崎方言 (飯豊毅一 他編 1983) に [paN] (食わぬ) [paŋi] (菓子) の例がみられる。

参考文献

飯豊毅一 他編 1983 『講座方言学 9 九州地方の方言』 国書刊行会

伊波普猷 1907 「P 音考」『古琉球』 (『伊波普猷全集』 第一巻 平凡社 1974 再収)

上田万年 1898 「P 音考」『帝国文学』 4 巻 1 号 (『国語のため第二』 富山房 1903 再収)

上村幸雄 1992 「琉球列島の言語 (総説)」『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』 三省堂

上村幸雄 2000 「八重山から東北方言まで——日本語の方言形成過程について——」『宮良當壮記念論集』 宮良當壮生誕百年記念事業期成会

内間直仁・新垣公弥子 2000 『沖縄北部・南部方言の記述的研究』 風間書房

内間直仁 2004 「古代日本語のワ行子音の [b] 音化について——宮古・八重山方言を中心に——」『国語学』 第 55 巻 2 号 国語学会

加治工真市 1982 「琉球, 小浜方言の音韻研究序説」『琉球の言語と文化』 論集刊行委員会

加治工真市 1997 「竹富方言音韻の研究」『沖縄県八重山の総合的研究』 平成 6 年~8 年度科学研究費補助金 [基礎研究・A・1] 研究成果報告書

- 亀井孝 他編 1964 『日本語の歴史 1 民族のことばの誕生』 平凡社
- かりまたしげひさ 2009 「琉球語の $\phi > p$ の可能性を考える——中本謙「琉球方言ハ行子音 p 音」への問い——」『沖縄文化』第 43 巻 1 号
- 菊千代・高橋俊三 2005 『与論方言辞典』 武蔵野書院
- 國學院大學日本文化研究所 編 1990 『琉球竹富島の方言』 國學院大學日本文化研究所
- 柴田武 2001 「《短信》九州・沖縄方言の 2 つの音声変化」『国語学』第 53 巻 1 号 国語学会
- 高橋俊三 1991 『おもろさうしの国語学的研究』 武蔵野書院
- 仲宗根政善 1983 『沖縄今帰仁方言辞典』 角川書店
- 中本謙 2008 「琉球方言のハ行子音 p 音—— $\phi > p$ の可能性をさぐる——」『沖縄文化』第 42 巻第 1 号
- 中本謙 2009 「琉球方言 p 音は文献以前の姿か」『沖縄文化はどこから来たか』 森話社
- 中本正智 1976 『琉球方言音韻の研究』 法政大学出版局
- 中本正智 1981 『図説琉球語辞典』 力富書房
- 中本正智 1990 『日本列島言語史の研究』 大修館書店
- 名嘉真三成 1996 「日本祖語のワ行音」『沖縄文化研究』22 号 法政大学沖縄文化研究所
- 服部四郎 1959 『日本語の系統』 岩波書店
- 服部四郎 1976 「琉球方言と本土方言」『沖縄学の黎明』 沖縄文化協会
- 久高島調査委員会編 1985 『沖縄久高島調査報告書』 法政大学沖縄文化研究所
- 外間守善 1986 『沖縄の言葉と歴史』 中公新書
- 宮良當壯 1930 『八重山語彙』 東洋文庫
- 柳田征司 1993 『室町時代語を通して見た日本語音韻史』 武蔵野書院
- 琉球大学沖縄文化研究所編 1967 『宮古諸島学術調査研究報告 言語・文学編』 琉球大学沖縄文化研究所

——琉球大学准教授——

(2011 年 7 月 4 日 受理)

Reconsideration of Consonantal “p” : Derivation of “p” with the Consonantal Value of [h] in Ryukyu Dialect

NAKAMOTO Ken

Keywords: Vowel shift, Consonantal p , Consonantal b, consonantal shift

There is a consensus that phonetically notated “p” with the consonantal valuation of [h] dates back to times before any written records were kept. I intend to demonstrate through the data I gathered during my field research trips that the derivation of the phonetically notated “p” is possibly linked to the phonetic transitional process described as $[\phi] > [p]$. The same process seems to be also related to the vowel shift that resulted in a decrease in the number of vowels employed in the Ryukyu Archipelago from five to three, which yielded [p] and [pʔ] in Northern Ryukyu and [p] and [f] in Southern Ryukyu dialects, respectively. If the five-vowel era is granted as the originating point in the consonantal phonetic shift, then, premising $[\phi]$ as the starting phonetic value of the consonantal valuations related to /h/ seems quite reasonable as well. The same phonetic shift also seems to have entailed a process that can be described as $[w] > [b]$. In view of such phonetic transition and the presumed contemporaneous introduction of relevant vocabulary into the region, I also focus on the relative recentness of the occurrence of the phonetically notated “p”. As further elucidation of the phonetic transitional process $[\phi] > [p]$, which most likely took place in the region, I also bring attention to some words that evidently demonstrate the transitional process $[kw] > [\phi] > [p]$.